

ハイデ

イ (第十二回)

津田芳雄譯

おばあさまのお發ちの日——クララにもハイデイにも悲しみの日が、たうさう來た。けれどもおばあさまは出来るだけ二人を悲しませないやうにミ、面白いこゝまばかり云つて二人を楽しませ、お別れの悲しみなご沈んでゐるひまもないやうにさせたので、二人も、いよくおばあさまが馬車に乗つて行つてしまつてから、やつきそれに氣がついたくらゐだつた。急に家ぢうはひつそりミ、がらんさうのやにうなり、クララもハイデイも、身のおきごころもないさびしさに、まるで二人の迷ひ兎のやうにぼつねんミ、その日いちんちすわつてゐた。

あくる日、二人が一緒に遊ぶ時間になるミ、ハイデイは繪本をかゝえてやつて來て、よかつたらこれから毎日わたしがご本を讀んできかせてあげ

ませうかミ云つた。クララが賛成したので、ハイデイは一生懸命に讀み出した。しかし、ほんの少し讀んで行くうちに、お話の中のおばあさんが死ぬところに来るミ、ハイデイは

「ああ、おばあさんが死んぢやつた!」

ミ叫びながら、わあッ泣き出してしまつた。

お話の中のことからは、ハイデイにはすつかりほんたうのこゝまに思はれて、山のペーテルのおばあさんが、ほんたうに死んでしまつたと思ひ込んだのである。ますく激しく泣きじやくりながら、

「おばあさんが死んぢやつたあァ——もう會へなくなつちやつたァ——白い巻パンを一つもあげないのに——」

ミ叫びつゞけた。

クララは一生懸命に、それはお話の中のものよその

おばあさんで、まるつきりちがふ人なのだと説明して、やつこハイディを納得させた。それでもハイディは、自分がこんなに速くに来てゐる間に、おばあさんが、それからもしかしたらおぢいさんまでが、死んでしまひはしないかしら、あんまり長いことおうちに歸らなかつたら、みんな死んでしまつて黙り込み、自分は一人ぼつちになつて、あの大好きな人達にも、お山にも、もう決して會へなくなつてしまふのではないかしらと思へて来て、なか／＼泣き止めることが出来ないのだつた。

丁度この時ロツテンマイアさんが這入つて来た。クララはハイディの泣いてゐるわけを話した。ハイディがなか／＼泣き止めないでロツテンマイアさんはいら／＼して、ハイディに詰めよつて行つて、きつぱりこ云ひ渡した。

「アデライデ、そんなわけのわからないことを云つて泣くのは、もう澤山です。はつきり云つておきますが、今度からご本なんか讀んでめそ／＼泣いてゐたら、取り上げてしまひますからね」

この言葉はハイディにはよ／＼こたへたご見え、眞蒼になつて涙を拭き、一生懸命にすゝり泣きをこらへてゐた。ご本はハイディにはたつた一

つの寶である。その後も、ぎんなに悲しいことが書いてあつても、ハイディは決して泣き聲を立てなかつた。けれども、涙を落すまいご一生懸命にもがいて、妙な顔をしてクララに笑はれることがよくあつた。でもぎんなに妙な顔をしようとも、それは聞えはしないから、ロツテンマイアさんを怒らせずすんだ。かうしてハイディは堪へ難い悲しみも、ちつ／＼こらへておこなしくしてゐたので、誰一人その悲しみに氣付く者はなかつた。だが、食べ物は少しも欲しくなくなり、顔色は蒼ざめ、すつかり瘦せてしまつた。セバスチャンは、ぎんなおいしい御馳走を渡しても、いつもハイディが要らないごいふのが、いぢらしくて見てゐられない氣がした。時々やさしいお父さんのやうな調子でさ／＼やいてやつた。

「ちよつ／＼ぶり食へて／＼らんない。ごでもおいしいのですよ。ほら一口ね、もう一口いかにです。」

それでも駄目だつた。ハイディは殆んご何も食べなかつた。夜、床につくや、山のおうちの有様が、目の前にちらつき、頭を枕におしあて、泣き聲をかみ殺しながら泣きつゞけるのであつた。かうして日はぎん／＼過ぎて行つた。ハイディ

が毎日眺める窓や壁には、季節のうつり變りにも何の變化もなく、外へ出るこも云つては、時たまクララの氣分のよい時に、疲れない程度にほんのそこいらまで馬車で出かけるのについて出るきりなので、ハイディには夏だか冬だかさへもわからなかつた。立派な街、大きな家、澤山の人々。そのほかには、なんにもない。草も花も樅の木もお山も、みんなみんな遠い遠いむかうだ。今ではなつかしいそんなものを、ちよつこでも思ひ出させるやうな一言をでも讀めば、ハイディは歸りたくて歸りたくて、涙が止めぎもなく流れ出しさうになるのだつた。でもそれを、一生懸命にくひしはつてゐた。秋がすぎ、冬が終つた。春の陽ざしが又お向ふの白壁を暖く照らしはじめた。ハイディは、今頃は又ペーテルが山羊たちをお山へ連れ出してゐるだらう、お山ではお花が金いろに輝き、お日様が沈む時にはそこいらぢうの岩が、眞赤に燃え出してゐるだらうなこも、それからそれへ思ひを馳せるのだつた。たまらなくなつて、もうお日様の照り輝くお向ふの壁なぞが見えないやうに、お部屋の間つこにかくれて、兩手で目を押へて坐り込むこもあつた。かうしてたつたひこ

りで、ちつこ歸りたくてたまらない思ひをかみしめてゐる時、クララがお晝寝から覺めて、呼びよこすのだつた。

十二、幽靈

この二三日、ロツテンマイアさんは、何だか黙り込んで、もの思ひにふけつてゐるやうだつた。暗くなつてから廣いこの家のさこの部屋に用事があつたり、長い廊下を渡つたりする時なごは、まるで後から誰かゞ尾けて來て、今にも着物を引つ張りでもしさうに、用心深くあたりを見廻し、暗い廊下の隅つこなごをのぞき込むのだつた。平生使はないお二階の廣い客間や、白襟のいかめしい法官服の元老院議員の額が幾つも睨み付けてゐて、自分の歩く足音までが、こだまのやうにひびき渡る、がらんとした氣味のわるい階下の會議室なごへ行かねばならない時には、決して一人で行かずに、何かミ用事にかこつけては、必ずティネッテを連れて行つた。するまティネッテもまた、その通りの眞似をするのだつた。お二階か階下かに用事のある時は、一人ではさても持てないものがあるからさか何さか云つては、きまつてセバスチャンと一緒にやつてもらつた。さころが更にお

かしなごこには、そのセバスタヤンまでが、家はづれの部屋なごから、何か出して来いごでも云はれるご、きつご馬丁のヨハンを加勢に引つ張つて行くのだつた。そのくせ、いつも加勢なご要つたためしもなく、一人でたくさんなのである。ヨハンはそれもちやんごわかつてゐるのだけれご、いつ何時、自分もまたセバスタヤンに同じごを頼まねばならぬごも限らないご思つて、いつも不平も云はずについて行つてやるのだつた。するご臺所では、長年勤めてゐる料理女が首をか上げて歎息しながら、つぶやいてゐた。

「長生きはしたくないもんだ、こんな目にまで會はうごは」

實に奇怪な出来事が、このゼーゼマン家の邸に起つてゐるのである。毎朝、召使ひ達が起き出して見るご、玄關の戸が何者かによつて開け放されてゐるのである。勿論あたりには人影もない。もしや泥棒の仕業かご、二三日は部屋ごいふ部屋をすつかり調べて見たが、何一つ持ち出された形跡はなく、すべてあるべき所にもやんご納まつてゐた。夜は扉に二重の錠をおろし、更に用心のため、門までもあてがつた——それでも、何の役にも立

たなかつた。翌朝には、戸はやはり開け放されてゐた。召使ひ達は、震へ上つて毎朝夜の明けないうちから起き出した。あたりはまだ深々夜の眠りに沈み、お隣では戸も窓も堅く閉ざされてゐるのに、それなのにこの家の戸は、やはり開いてゐた。遂にロツテンマイアさんは、さんざセバスタヤンごヨハンを説き付けて、ある晩會議室の隣の部屋で寝ずの番をさせるごにした。ロツテンマイアさんは、ごごから御主人の武器類を見付けて来て、お酒を一本添へてセバスタヤンに渡し、萬一の場合に勇氣のぐぢけない様にした。

いよ／＼その晩になるご、二人は部屋に陣取り、まづ元氣付けにご、一杯かたむけた。その勢ひで、はじめは大層な御機嫌で話し込んでゐたが、そのうち二人ごも眠くなり、椅子にもたれてぐう／＼寝込んでしまつた。十二時を打つた時、セバスタヤンがふご目を覺まし、ヨハンを呼んで見たが、なか／＼目を覺まさず、他愛なくあちらにごつくり、こちらにごつくりご舟を漕いでゐた。セバスタヤンは一心に耳を澄ました。あたりはしーんごして、街の物音もすつかり途絶えてゐた。あんなり靜かで氣味がわるくなり、もはや睡氣なごはご

こかへすつ飛んでしまつて、ヨハンを呼び起す自分の聲までが怖ろしくなつて、しまひには黙つて靜かにゆすぶつた。一時を打つてヨハンも目を覺まし、やつこ何故今夜自分がベッドに寝ないでここにかうやつて椅子にかけてゐるかを思ひ出し、すつこ立ち上るこ、さもく勇氣ありげに云つた。

「さあセバスタチャン、そろく出かけて様子を見て來なくちやなるまいぜ。恐がるこたあないさ、ついでおいでよ」

ところが一步廊下へ踏み出した途端、開け放された玄關の戸から、さつこ一陣の風が吹き込んで來て、ヨハンの手の蠟燭を消してしまつた。ヨハンは命がけでセバスタチャンにしがみ付き、そのま元の部屋に轉がり込むこ、大急ぎでドアを閉め、震へて自由の利がない手で無理矢理に鍵をかけた。それからマツチを掴み出し、蠟燭に火をつけた。セバスタチャンはあまりの急なこに、何が何やら少しもわからなかつた。前に行くヨハンの驅が大きくて、お玄關の戸の開いてゐるこも、風の吹いて來たこも、なんにも見えなかつたのである。しかし今、蠟燭の火でヨハンの顔を見るこ、

驚いて聲をあげた。ヨハンは幽霊のやうに眞蒼な顔をして、からだ中ぶるく震へてゐる。

「おい、きうしたんだ。そまに何が見えたんだ」セバスタチャンは心配してたづねた。

「玄關の戸が半分ほき開いてるんだよ」

ヨハンは息をはづませてゐる。

「それから、階段の上に、白い着物を着たものが立つてゐる——こ思ふ間に、すうつこ消えちまつたんだよ」

セバスタチャンはぞつこした。二人はびつたりこ身を寄せ合つたまゝ、朝まで身動きもしなかつた。街がざわめき出した頃、やつこ立ち上り、二人で一緒に玄關の戸を閉め、ロツテンマイアさんに事の次第を報告に行つた。ロツテンマイアさんも、昨夜からまんじりこもせず、二人の知らせを待つてゐたのであつた。二人の話を聞くこ、早速ゼーゼマン氏にお手紙を書いた。ゼーゼマン氏に見れば、こんな手紙をもらつたのは、恐らく生まれ初めであらう。

「書も手も震へ、筆さへ思ふにまかせませぬ。旦那様、何卒一刻も早く御歸宅下さいませ。身の毛もよだつ妖しき事さも出來いたし、この分に

ては皆の者生命のほぎもおぼつかなく、如何なる結果に立ち到るやも計り難く……」

そして、毎朝玄關の戸の開いてゐる事なき、こまごま述べて立ててあるのだつた。

ゼーゼマン氏からは、今すぐ用事を捨てて歸るわけには行かないと云つて來た。幽霊の話にはする分驚いたが、もうこの手紙の著く頃には、消え去せてゐるだらう。もしまだ家中をさわがせてゐるやうならば、母に手紙を出して、來てもらつてほしい。母ならきつゝ幽霊をも退散させてくれるであらうと書いてあつた。ロツテンマイアさんには、眞面目に對手になつてくれないその手紙の調子が、氣に入らなかつた。御隠居さまにもすぐお手紙を出したが、やはりロツテンマイアさんの満足のゆくやうなお返事は來なかつた。その中のある部分なきは、全くひきを馬鹿にしてゐるミ、ロツテンマイアさんは腹を立てた。あなたが幽霊を見られたからと云つて、今歸り著いたばかりのわたしが、はるばる又旅をして、ホルスタインからフランクフルトくんだりまで、出かけて行く氣にはなれない。あの家には、わたしの知るかぎり、未だ幽霊なきの出たゝめしが無い。今度出

たきすれば、それはきつゝ生きた幽霊だらうから、あなたにも處置出来る筈だ、もし出來なければ、夜番でもおいた方がよいだらうと、書いてあつたのである。

ロツテンマイアさんはしかし、このまゝでは一日も過ごすまいと決心した。それには最もきつゝ目のある方法があつた。すなはち、今までは事が一層面倒になつて自分に餘計手がかゝつて來ることを恐れて一切話してなかつたのを、この日ロツテンマイアさんは、つか／＼と勉強部屋に這入つて行き、子供達に、低いうす氣味わるい聲を出して、この頃の出來事をすつかり話して聞かせたのである。果してクララが悲鳴をあげて、もう一分間だつて一人であるのはいやだ、お父様に歸つていたんだ、ロツテンマイアさんは一緒にこの部屋で眠つてくれ、ハイディだつて、幽霊に何をされるかわからないから、一人で寝てはいけない、みんな一緒に一つの部屋にかたまつて、あかりをつけて寝よう、ティネットもお隣の部屋に寝て、セバスタンミヨハンには、廊下で見張りをしてもらひ、もし幽霊があらはれたら、階段から追ひ拂つてもらはうなき、止めきもなく愉がりはじ

めた。これにはロツテンマイアさんも、なだめるのにする分手こすつて、お父様にすぐお手紙を書くこと、ベッドをこゝに持つて來させて泊つてあげることを約束し、こゝにみんな一緒に眠ることは出来ないから、ハイディはもし怖かつたらティネッテに泊りに來てもらへばよいと云つた。ハイディは幽霊なまゝいふものは生まれてから一ペんも聞いたことがないので、そんなものよりティネッテの方がよつぽき怖いのだつた。それで、幽霊なんかちつこもこわくないからひそりで寝ることにわつた。

ロツテンマイアはゼーゼマン氏に二度目のお手紙を書き、先日來のえたいの知れぬ出來事がお嬢様のおからだにひそく影響して、このまゝすておけばぎの様な取り返しつかぬことを惹き起さないうも限らない、癩癩の發作なきは得てしてかういふ場合に突然起りやすいものであるが、皆の怖がつてゐるこの事件の原因が取り除かれぬかぎり、そんな發作の起らぬものでもない、なきゝ云つてやつた。

效果觀面、二日後にはゼーゼマン氏が玄關に立つて、引く手ももさかしげにベルを鳴らしてゐる

た。その音があんまり激しいので、召使ひ達は、全部、こわく飛び出して來て、さては幽霊の奴、夜中だけではまだ足りず、ひる日に横行をはじめたのか、互ひに顔を見合はせて震へ上つてゐた。セバスチャンは要心ぶかく戸を細目に開けて、おそろ／＼のぞいて見た。その途端に、又ベルが激しく鳴つた。それがおよそ幽霊らしくないがつしりとした手で鳴らされてゐることは、もはや間違ひはなかつた。セバスチャンにはそんな鳴らし方をするのは旦那様よりほかにはないといふことがわかつてゐたので、轉ぶやうに階段を駆け降りて、大急ぎで門を開けた。

ゼーゼマン氏はまつすぐに娘の部屋に行つた。クララは聲をあげて喜んでお迎へした。その生き生きとした、ふだんどの變りもない様子を見るま、お父様の顔は晴れ晴れと蘇り、娘の口から、からだは少しもわるくなく、それどころか、幽霊さわぎのおかげでお父様が歸つて來て下さつたこと思へば、幽霊の出てくれたのがうれしくらるだに聞かされて、心配の眉もだん／＼とほぐれて來るのだつた。

「さうして、幽霊氏はその後さうしてゐますね」

お父様はいたづらつぼく眼を輝かせながらロツテンマイアさんにたづねた。

「まつたく、笑ひごこちではございませぬよ、旦那様。あなた様も明朝になれば、きつこお笑ひにはなれますまい。これは昔なにか恐ろしいごことが行はれて隠されてあつたのが、今崇つて居るのでございませぬ」。

「ほう、そんなご事は初耳ですな。しかし、ほかのごご違ひ、名譽あるわが先祖にさやかく疑ひをかけるごごだけは、止していただきませう。あ、セバスチャンを食堂へ呼んで下さい。あの男ひごりのごころで、ちよつこ聞いて見たいごごがありますから」。

ゼーゼマン氏は、セバスチャンとロツテンマイアさんがあまり仲のよくないのを知つてゐるので、この幽霊さわぎも、もしやご思ふふしがあるのだつた。

「あゝ、こつちへおいで」

セバスチャンが來たのを見て主人は云つた。

「なにもかも、あけすけに話すんだよ。まさかお前は、ロツテンマイアさんを脅かしてやらうご思つて、あんなさわぎを起していたづらしてゐるんだ

やないだらうね」

「さういたしました、旦那様。さうかそんなお疑ひは、御勘辨ねがひます。肝心のわたくしが幽霊がおつかなくて困つて居るのでございませぬから」

セバスチャンはあり／＼と眞實をこめて云つた。

「よし、もしさうなら、明日の朝は、わしが幽霊を生け捕つてお前ごヨハンに見せてやらう。おい、セバスチャン、いゝ若い者が、幽霊がこわくて逃げ出すなんて、恥づかしくないのかい。ごころで、わしの舊友の醫者の家へ使ひに行つて來てくれ。まつわしからよろしくご御挨拶し、今夜九時きつかりに來ていたゞけるか御都合を伺つて、わしが先生に診ていたゞきにバリから歸つて居て、非常に重態ゆゑ、今夜は泊つていたゞかねばならないから、その御用意を願ひます、ご申し上げるんだよ、わかつたね？」

「はい、承知いたしました」

それからゼーゼマン氏はクララのごころへ戻つて行き、もう心配しなくても、幽霊は必ず見付け、始末して上げるからご云つて聞かせた。

子供達も寝つき、ロツテンマイアさんも部屋に

引き取つた頃、九時きつかりに、お醫者様がやつて來た。白髪あたまの、活き活きした顔色の、眼のやさしい人だつた。ゼーゼマン氏がぎんなにわるいのかと、心配しながら這入つて來たが、元氣な姿を見付けるに、大きな笑ひ聲をひびかせながら、その患者の肩を叩いた。

「おや、これは大した重病んだ、徹夜で立ち合へなんて云つて、ひみを呼び寄せておいて」

「お待ちなさい。今夜あなたに立ち合つて頂かねばならぬ病人は、捕まへて見れば、きつともつこ大へんな重病人の様子をしてゐますよ」

「するまこの家には、誰かほかに病人がゐて、しかもまつ、捕まへてかゝらねばならんのですな」

「それどころではないのですよ、先生。わたしの家は、幽霊に取り憑かれてゐるのですよ！」

お醫者様は大聲で笑ひ出した。

「薄情なひこだな、この人は。ロツテンマイア女史にこの笑ひ聲を、ひみつ聞かせてやりたいものですよ。可哀さうに、あの女史が來たら、これはてつきり先祖の誰か昔犯した罪の罪ほろぼしに、家中をうろつきまわつてゐるのだと、かんに信じ込んでゐるのですからな」

「へーえ、さうして又、そんな御先祖なんかお近付きになつたんでせうな」

お醫者様は面白さうにたづねた。